

全 A ネット就労支援セミナーin 沖縄

未来につながるおーkinawa！

「A 型でディーゼントワークを実現できるか」

全 A ネット就労支援セミナーのテーマは「A 型でディーゼントワークを実現できるか」で会場とオンラインのハイブリット開催を予定しておりました。しかし、今回新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け完全オンライン開催の運びとなりましたが、それでも 120 名以上の方にご参加いただきました。

初めに沖縄 A 型ネットワーク代表の玉城卓さんの挨拶から始まり、午前のセミナーでは、厚生労働省専門官の井上量氏より A 型の未来予想図をテーマとして主に報酬改定、就労系サービスの現状、障害者雇用と福祉施策の連携強化について等説明を頂きました。就労継続支援 A 型の基本報酬では、短時間就労の利用者の支援ニーズや健全化を図る事業所の実態を十分に反映するため、1 日の平均労働時間以外の評価項目を新たに 4 項目追加し、合計 5 項目程度の評価項目から算出。「労働時間」他、「生産活動」、「多様な働き方」、「支援力向上」、「地域連携活動」で評価点をつけ基本報酬を算出することを検討していると話がありました。また、評価内容を公表していない事業所は報酬減算を検討しており、今後 A 型の在り方については、職業安定局と連携し検討を進めていくことが考えられているようです。現状より一般就労への移行促進についても検討されており、一般就労移行実績を更に評価し、新たに就労継続支援から就労移行支援に送り出した場合にも一定の評価を検討していると話がありました。その他、就労支援員として、作業療法士を配置する場合には福祉専門職員配置加算を検討しているとのことでした。質疑応答では、オーガナイザーのこのわ前田理事長からの質問にも丁寧に答え、具体的に A 型が今後進む方向性が見える質疑応答となりました。

午後は全 A ネット理事長久保寺理事長より、全 A ネット今年度の事業説明へ。就労継続支援 A 型事業所の現状として、実に 6 割の事業所において生産活動収入が不足していることを指摘し、全 A ネット事務局では、各事業所が良質な仕事を確保すること、技術的及び組織的体制強化が重要だと共同受注事業を提案頂きました。

シンポジウムでは、シンポジスト 4 名による事例紹介をして頂きました。ファシリテーターの農林生産政策研究所の吉田氏は、農福連携に取り組む A 型事業所の先進事例の紹介。地元、沖縄県宮古島にある水耕栽培の事例などを取り上げ、A 型 B 型には居場所づくりが必要であり、人を「地域の宝」にする農福連携を目指すことが重要と話しました。

ソーシャルファームもぎたての中原氏は、ノウハウで A 型は成立するのかをテーマに、和歌山県で行う耕作放棄地を利用した有機たまねぎづくりのご紹介頂きました。「一人の人として労働者として」生活を向上していく仕組みづくりの一つとして『農福連携』を目指していると話しました。

沖縄がらまんファームの新里氏は、農家としての立場で A 型事業所と連携した農福連携

事例を紹介。連携して助け合いが生まれ、作業効率が良くなっている点や、作業ミスによる動揺が起きた時の課題について報告しました。

最後に Agricola 代表水野氏より、卵を購入することが利用者さんの給料になり、幸せな働く場を作っている。」と養鶏でオーガニックエッグの生産を行い、有名ホテルとの取引についてなど成功事例を取り上げ、「障害者でいたい人、病気で居続けたい人は続けられない。」と利用者との関係、農福の厳しさ、難しさなどを話していただきました。

事例報告後、ファシリテーターの全A ネット監事の里見氏が、A型で本当に農福を運営できるのか？等、核心を突いた質問をするなど、Zoom 会議の中で楽しく場を盛り上げ話はひろがっていきました。その中で、水野氏より「市場はブルーオーシャンで戦うこと、より付加価値をつけたもので戦い市場価値をつけ追求する。農福連携では付加価値をつけることは大切なことだと思う。」「農福連携を見てきたが、施設外に疑問がある。まともな賃金をもらえなければ、真の農福連携ではないのではないかと思う。まっとうに賃金をしっかり支払うことができる農福連携をしていきたい。」と今後の運営でヒントになる話をしていました。